

『東方』二八二号より

「満洲」日本人社会の 裂け目を覗く作品群

西原和海（文芸評論家）

刊行後半年あまりの現在、本書に対する読書界の反響は、版元や編者の予測を越えて相当にぎやかだというふう
に仄聞している。その成功はやはり、「探偵小説」と「満
洲」とを一冊の中に結びつけてみせた、編者・藤田知浩氏
の眼の付けどころのよさというか、企画の新鮮さ、意表
性、今日性に大きく負っていると見ていいだろう。

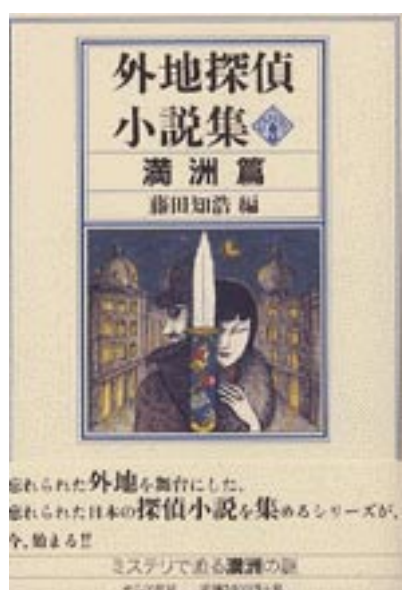
日本ミステリの歴史については、現在、かなり細かいと
ころまで研究しつくされているといった印象なのだが、
「満洲」という視角からの取組みは本書をもって嚆矢とす
る。藤田氏は「満洲」というテーマのもと、従来の文学史
に埋もれていた作品脈脈を発掘し、ここに一卷のアンソ
ロジーを編みあげることができた。ミステリの愛好家たち
にとって、本書の出現はなかなか挑発的に見えるだろうし、
これは、どうしても手にせずにはすまされない一冊である
に違いない。

一方、満洲（関東州・満洲国）に関する研究は、近年、
政治史・経済史・思想史・社会史・文化史など、さまざま
な領域からのアプローチが進められていて、今後ますます
活況を呈してきそうな気配である。これらの分野の研究者
をはじめ、満洲に何らかの関心をもつ人たちにとっても、
本書は無視できない（とまでは言わなくても、いささか興
趣がそえられる）存在であることだろう。

藤田知浩編

『外地探偵小説集 満洲篇』

四六判・三二二頁・せらび書房・二、五二〇円



本書には九篇の小説が選ばれている。いずれも、作品の
舞台として満洲が描かれている。それらの作者名と作品タ
イトル、発表年度を掲載順に紹介しておく。

おぼたけとし
大庭武年「競馬会前夜」
（一九三〇年）
群司次郎正「踊子オルガ・アルローワ事件」
（一九三二年）

城田シユレーダー「満洲秘事 天然人参譚」
（一九三二年）

崎村雅「龍源居の殺人」
（一九三五年）

宮野叢子「満洲だより」
（一九四〇年）

渡辺啓助「たちあな探検隊」
（一九三九年）

椿八郎「カメレオン黄金虫」
（一九四九年）

島田一男「黒い旋風」
（一九五二年）

石沢英太郎「つるばあ」
（一九六三年）

といった構成になっている。この配列はまた、作品の発表

された時代順にほぼ従っていて、そこに編者の一つの工夫もこらされている。つまり、満洲国建国以前から、その崩壊後に至るまでの満洲の諸相が、それとなく読者に意識されるような味つけがほどこされている。

恐らく読者のおおかたが、これらの作家たちの名にはなじみが薄いのではないのか。このうち、島田一男と石沢英太郎は、つい近年まで現役として活躍していたので、比較的よく知られている方だろう。渡辺啓助は戦前から書いていた人で、探偵小説ファンの間には、今もこの作家の支持者が少なくないと聞く。群司次郎正は一九三〇年代の初め、『サムライ・ニツポン』などの著者として人気を博した大衆文学作家である。

大庭武年や椿八郎、そのほかの作家となると知る人ぞ知る、一般の知名度はさらに低くなる。このように現在ではあまり読まれることがなくなった九名の作家を、「満洲もの」の作品という共通項のもとに系列化し、これらの作家と作品とに新たな照明を当てようとしたところに、この本のオリジナリティを見ることができるといえる。

それだけではない。これらの作家たちには、もう一つ別の共通項も存在する。彼らの半数以上が、満洲に定住していたという点である。大庭、宮野叢子、椿、島田、石沢たちがそうであった。また、群司や渡辺には満洲旅行の体験がある。城田シュレーダーと崎村雅の場合はどうであったか、この二人については今後の調査が待たれよう。

それぞれの作家の経歴をめぐっては、本書における、編者の要領よい紹介記事に任せるとして、彼らの満洲在住体験にしばって、それに若干の補足を試みておくと――

大庭武年と椿八郎は共に満鉄（南満洲鉄道株式会社）の社員だった。大庭は一時期、『新青年』など日本国内の雑

トップページにもどる

誌に本格派ミステリを矢継ぎ早に発表したのだったが、満洲のメディアではさらに多面的な執筆活動を見せている。椿も在満時代、本名の藤森章の名義で医事関連のエッセイをよく書いていたし、満鉄社員会の機関誌『協和』にミステリもどきの短篇を残したりもしている。

新聞記者だった島田一男は、実話ふうの文章を満洲の雑誌にときどき寄稿する一方、満洲開拓移民に関する案内書を何冊か匿名で出すことがあった。石沢英太郎が本名の沢井寛で詩を発表していたことや、宮野叢子がやはり本名の林紅子を用いて、いくつかの創作を娯楽雑誌に寄せていたことなどは、もはやほとんど記憶する人もあるまい。

右に挙げた五名の作家たちは、ただに満洲での生活体験を共通項としていただけではなく、その地で文筆に深くたずさわっていたという体験をも共有しているわけである。こうした事実からおのずと浮かびあがってくるのは、「探偵小説」と「満洲体験」との関わりの問題、より限定的にいうと「探偵小説」と、いわゆる「満洲文学」との重なり合いの問題であろう。

編者の藤田氏が、これら五名の作品を本書に採ることになったのは、あまたの候補作の中から選びぬいたすえの結果においてそうだったのか、それとも、彼らが満洲体験者であることが先験的に作品評価の基準としてあったからなのか、そのところは微妙に思われる。

率直に言って私は、本書に収録された諸作をそれほど面白く鑑賞したわけではない。作品としての完成度に飽きたりなさを覚えるものも少なくなかったし、何より第一、とくにステロタイプ化した満洲イメージの氾濫に落胆せざるを得なかったのである。ここに多く描かれているのは、とかく猟奇と欲望の視線に侵犯されがちな、すでに皆

さんおなじみの満洲シーンにすぎない。

いくらか安心して読めたのは、やはり、満洲在住の経歴を有する作家たちによって書かれた作品であった。そこには、満洲に対する作者の、生活体験よりくる実感といったものが裏打ちされていて、その一篇に確かな質量をもたらしているからである。とりわけ私に印象的だったのは、宮野叢子の「満洲だより」であった。

この作品は、大連に渡ってきた日本人青年と、日本に住むその妹との間に交わされた往復書簡によって構成されている。特にきわだった犯罪が扱われているわけではないし、トリックや謎解きの部分に斬新さがあるわけでもなく、一篇のミステリとしては、かなり地味で小ぶりの作風ではあるのだが、一読、私はこれを本書中の白眉と認めたくなったのだった。

と言うのも、ここには、当時の在満日本人の生活感覚が、主人公の青年の姿を通して、なかなかのリアリティをもって描かれていたからである。例えば、彼の住む宿舍の雰囲気に関わる描写が、いかにも満鉄の独身社員寮あたりを彷彿させるといったふうにある。そして、そうした筆致を支えている技量こそ、作者の現地での生活体験に根をもつのではないかと想像されたのだった。

本書巻末の「解説」の中で藤田氏も指摘しているように、この作品には「異文化のぶつかりあい」といったテーマが抜かりなく挿入されている。作者はここで声高に民族問題（日本人と中国人との関わり）を語ろうとしているのではない。日本人社会の一見穏やかな日常生活の足もとに、大きな裂け目を隠して横たわる問題の所在をそれとなく暗示するにとどめている。

この物語の舞台が暗転したところに生まれたのが、日本

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

敗戦後の大連の様相を描いた小説、石沢英太郎の「つるばあ」だと見ていい。あの大きな裂け目に、日本人社会が丸ごと飲み込まれてしまったのだ。石沢の作品では民族問題が前面に取り上げられることになる。本書の中では、これも読み応えのある一篇ではあった。

さて、藤田氏は本書「まえがき」において、次のように記している。「多くの日本人が住み、国家までつくられた満洲には、今も多くの謎が残されている。はたして満洲とは何だったのか。謎解きの形をとった探偵小説の中に、その答えの手がかりが幾つも隠されている」と。

つまり、本書一卷をもつて「探偵」になぞらえ、その彼に「満洲の謎」を解明させようというのである。右の引用には、本書編纂に当たつての藤田氏の自負と期待とがこめられている。だが、事態は逆なのではあるまいか。そうは簡単には答えは出そうもない。むしろ本書の存在によって、「満洲の謎」はさらに深まったと言えるのではないのか。本書出現の意義とは、実にそこに求められるのではあるまいか。

謎はもつともつと深められるべきだろう。その謎の最奥部においてこそ、「満洲の謎」を解明する手がかりも得られよう。早い話が、本書に選ばれた作家の多くが、その満洲歴にせよ作品歴にせよ、まだまだ謎に包まれたままなのである。本書に選ばれることのなかった作家たちの場合はどうだったのかという問題も残る。

先に私が触れた、「探偵小説」と個々の作家の「満洲体験」、あるいは「探偵小説」と「満洲文学」との関わりの問題もさらに謎を増幅していく。探偵小説作家の人材をそれなりにかかえながら、なぜ満洲国ではこのジャンルの文学が成立しなかったのかという疑問も、その一つなのである。